

芥川龍之介

漱石山房の秋



漱石山房の秋

夜寒の細い往来を爪先上りに上って行くと、古ぼけた板屋根の門の前へ出る。門には電灯がともっているが、柱に掲げた標札の如きは、殆ど有無さえも判然しない。門をくぐると砂利が敷いてあって、その又砂利の上には庭樹の落葉が紛々として乱れている。

砂利と落葉とを踏んで玄関へ来ると、これも亦古ぼけた格子戸の外は、壁と云わず壁板と云わず、悉く蔦に蔽われている。だから案内を請おうと思つたら、まずそ

の蔦の枯葉をがさつかせて、呼鈴ベベルの鈕ボタンを探さねばならぬ。それでもやっと呼鈴を押すと、明りのさしている障子が開いて、束髪に結った女中が一人、すぐに格子戸の掛け金を外してくれる。

狭い三畳の玄関には、泰山の金剛経の石刷を貼った、二枚折りの屏風が立っている。此処ここに帽子や外套がなかったら、まず先客はいないものと思つて差支えない。

玄関から右手の廊下へ出ると、唐めいた欄干の続いた外には、もう秋風に裂けた芭蕉の葉が、娑婆と星月夜の空を払っている。昼見るとその芭蕉の下には、霜にめげ

ない木賊とくさの色が一面に庭を埋めているが、客間の硝子戸を洩れる電灯の光も、今は其処までは照らしていない。いや、その光がさしているだけに、向うの軒先に吊した風鐸ふうたくの影も、反かえって濃くなつた宵闇の中に隠されている位である。

硝子戸から客間を覗いて見ると、雨漏りの痕と鼠の食つた穴とが、白い紙張りの天井に斑々とまだ残っている。が、十畳の座敷には、赤い五羽鶴の毯たんが敷いてあるから、畳の古びだけは分明ではない。この客間の西側（玄関寄り）には、更紗さらさの唐紙からかみが二枚あつて、その一枚の上に古

色を帯びた壁懸けが一つ下っている。麻の地に黄色に百合のような花を繡ぬいとったのは、津田青楓氏か何かの凶案らしい。この唐紙の左右の壁際には、余り上等でない硝子戸の本箱があつて、その何段かの棚の上にはぎっしり洋書が詰まっている。それから廊下に接した南側には、殺風景な鉄格子の西洋窓の前に大きな紫檀したんの机を据えて、その上に硯や筆立てが、紙絹しけんの類や法帖あまと一しよに、存外行儀よく並べてある。その窓を刺した南側の壁と向うの北側の壁とには、殆ど軸の挂かかっていた事がない。蔵沢ぞうたくの墨竹ぼくちくが黄輿きゆういの「文章千古事」と挨拶をして

いる事もある。木庵もくあんの「花開万国春」が呉昌蹟ごしょうせきの木蓮
 と鉢合せをしている事もある。が、客間を飾っている書
 画は独りこれらの軸ばかりではない。西側の壁には安井
 曾太郎氏の油絵の風景画が、東側の壁には斎藤与里氏の
 油絵の草花が、そうして又北側の壁には明月禅師の無絃むげん
 琴きんと云う草書の横物が、いずれも額になって挂かってい
 る。その額の下や軸の前に、或あるいは銅瓶に梅もどきが、
 或は青磁に菊の花がその時々で投げこんであるのは、無
 論奥さんの風流に相違あるまい。

もし先客がなかつたなら、この客間を覗いた眼を更に

次の間へ転じなければならぬ。次の間と云つても客間の東側には、唐紙も何もないのだから、実は一つ座敷も同じ事である。唯此処は板敷で、中央に拵げた方一間あまりの古絨氈ふるじゆうたんの外には、一枚の畳も敷いてはない。そうして東と北の二方の壁には、新古和漢洋の書物を詰め、無暗に大きな書棚が並んでいる。書物はそれでも詰まり切らないのか、じかに下の床の上へ積んである数も少くない。その上やはり南側の窓際に置いた机の上にも、軸だの法帖だの画集だのが雑然と堆うづたかく盛り上っている。だから中央に敷いた古絨氈も、四方に並べてある書物の

おかげで、派手なるべき赤い色が僅ばかりしか見えていない。しかもそのまん中には小さい紫檀の机があつて、その又机の向うには座蒲団が二枚重ねてある。銅印が一つ、石印が二つ三つ、ペン皿に代えた竹の茶箕ちやき、その中の万年筆、それから玉の文鎮を置いた一綴りの原稿用紙——机の上にはこの外に老眼鏡が載せてある事も珍しくない。その真上には電灯が煌々と光を放っている。傍には瀬戸火鉢の鉄瓶が虫の啼くように沸っている。もし夜寒が甚しければ、少し離れた瓦斯ガス煖炉だんろにも赤々と火が動いている。そうしてその机の後、二枚重ねた座蒲団の上

には、何処か獅子を想わせる、脊の低い半白の老人が、
或は手紙の筆を走らせたり、或は唐本の詩集を翻したり
しながら、端然と独り坐っている。……

漱石山房の秋の夜は、こう云うしようじしよう蕭条たるものであつ
た。

日本文学電子図書館

「芥川龍之介随筆集」

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店

2014年3月14日 第1刷発行



日本文学電子図書館